

【小中共通】

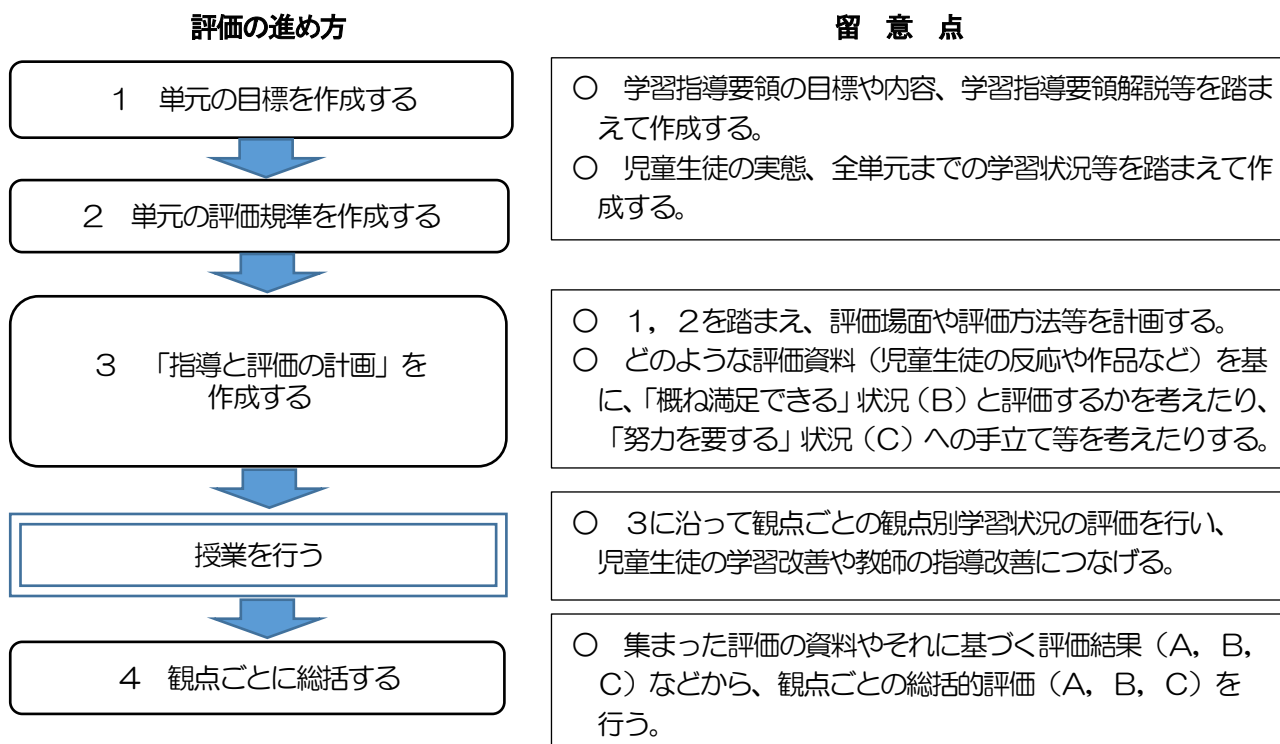
学習評価についての基本的な考え方（ 評価作成の手順と総括の仕方 ）

那覇教育事務所

1. 学習評価の進め方について（第3編P2～P3）

まず、年間の指導と評価の計画を確認する。その上で、学習指導要領の目標や内容、「内容のまとめりごとの評価規準」の考え方等を踏まえ、以下のように進める。

（複数の単元にわたって評価を行う場合など、以下の方法によらない事例もあることに留意する）



2. 観点別評価の在り方

< 指導に生かす評価 >

・個に応じた指導や授業改善等に生かすことを目的とした評価

学習内容を確実に習得できるようにするために、単元を通して適宜行うことが大切。児童生徒が「何ができていればよいのか」を具体的に想定しておく必要がある。また、「努力を要する」(C) 状況の児童生徒に対する指導の手立てを計画しておく必要がある。

（全児童生徒を対象にはしていないが、必要に応じて総括の資料にも活用）

< 記録に残す評価 >

・各教科等の目標の達成状況を把握することを目的とした評価

〔知識・技能〕単元末におけるテストのみで評価するのではなく、毎時間の机間指導、ノート記述、適用問題からの情報も得ながら評価の妥当性を確保する。実態によって数値的な規準を設け、評価を進める。

〔思考・判断・表現〕単元末ペーパーテストだけで「A」評価を見極めることは難しい。あくまで授業中の問題発見や解決の過程において記録された情報をもとに評価することが望ましい。

〔主体的に学習に取り組む態度〕単元前半から後半にかけて高まることが考えられる。チェックリストや座席表などを用意し児童生徒の反応を書き込めるようにしておく。

「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」の関係 評価の補完

- ・それぞれの時間のねらいに照らしながら、ある観点について重点的に評価したり、補充的に評価したりすることが重要である。
- ・児童生徒の状況が、指導を進めるにつれて変化していく様子を捉えることも重要である。

3. 単元の観点別学習の評価に係る記録の総括（例）

	次	第1次					第2次		第3次			児童の様子に関する特記	単元 総括
		時	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
K児	知										B	余りのある除法の計算が確実にできる。(第9時)	B
	思			*	C						B	図を使って説明する際に、等分除と包含除を混同しており、指導が必要だった。(第3・4時)	B
	態						B	B				C	ブロックや図を使って進んで考えようとしていた。(第1時) 日常生活に結びつけることは難しい。(第10時)
T児	知										A	余りのある除法の計算が確実にできる。(第9時)	A
	思				B			*			A	余りの意味について自力解決の段階では誤答だったものの、対話的な学びの中で気づくことができた。(第7時)	A
	態						B	B				A	日常生活に結び付け、紹介することができた。(第10時)

(*)は、指導に生かす評価をした時間で、Cの子だけを把握（記録）しておき、その後の変化の様子を捉えるようにする。(特記事項に記入)

評価結果のA、B、Cの数を基に総括する場合

単元	知識・技能			思考・判断・表現			主体的に学習に取り組む態度			学期末 総括			評価
	①	②	③	①	②	③	①	②	③	知	思	態	
A児	A	B	B	B			B			B			
B児	A			A			B			B	A	A	3

例)

- ・3回評価を行った結果が「ABB」ならば、Bと総括することが考えられる。
- ・「AABB」をAとするかBとするかなど、同数の場合や三つの記号が混在する場合の総括の仕方をあらかじめ各学校において決めておく必要がある。

評価結果のA、B、Cを数値に置き換えて総括する場合

単元	知識・技能			思考・判断・表現			主体的に学習に取り組む態度			学期末 総括			評価
	①	②	③	①	②	③	①	②	③	知	思	態	
A児	A	B	B	B			B			B			
B児	A			A			B			B	A	A	3

例)

- ・A=3 B=2 C=1のように数値によって表し、合計したり平均したりする。
- ・総括の結果をBとする範囲を $2.5 \geq \text{平均値} \geq 1.5$ とすると、「ABB」の平均値は、約2.3〔 $(3+2+2) \div 3 = 2.3$ 〕で総括の結果はBとなる。
- ・学期末の総括から評価を出す際は、数値に置き換えて総括する場合とABCの出現率で総括する場合がある。